

| | |
|---------|-----------------------------------|
| 氏名 | 大宮 めぐみ |
| 授与した学位 | 博士 |
| 専攻分野の名称 | 学術 |
| 学位授与番号 | 博甲第4992号 |
| 学位授与の日付 | 平成26年 3月25日 |
| 学位授与の要件 | 環境学研究科 生命環境学専攻 (学位規則第5条第1項該当) |
| 学位論文の題目 | 病院給食における地場産農産物導入の今日的意義と展開方策に関する研究 |
| 論文審査委員 | 教授 小松 泰信 教授 横溝 功 准教授 駄田井 久 |

学位論文内容の要旨

本研究の課題は、地域に根ざした社会資本の一つである病院給食を対象として、地場産農産物導入の今日的意義を明らかにし、その展開方策を提言することにある。近年、地産地消が注目される一方で、給食分野における地場産農産物の普及率はきわめて低い。その背景として、地場産農産物の選択的使用が食材料管理における優先度の高い項目ではないことがある。しかしながら、地産地消が、輸入農産物に対する国産農産物の優位性を広め、深める活動と捉えれば、安価な輸入農産物やそれに準ずる加工品の使用が懸念される当分野において、本活動を展開する意義は大きい。そこで、本活動の具体的な展開方策と今日的意義について検討を進めた。

第一に、食材購入の特徴と全国的な動向について検討し、納品者として、集荷・分荷・配達・情報伝達機能を持つ小売店や仲卸業者をあげた。また、全国的な地場産野菜の常用率は56.3%であり、6割以上が小売店から購入していることを明らかにした。第二に、農業協同組合（以下、JA）の一員である厚生連病院を対象にその実態について検討し、厚生連病院は一般病院に比べ地域農業を意識しており、本活動の先進事例となることを明らかにした。第三に、JAの病院給食における対応について検討し、地域公益性を発揮できる活動の一つとして地産地消があることを明らかにした。第四に、業務委託下での活動方策について検討し、地場産農産物導入には、契約内容への明確な記載が活動根拠となることを明らかにした。第五に、活動の意義を検討し、質の高い給食提供に寄与する循環過程と、病院の透明性を高めることが地域農業を意識した給食運営を可能にすることを明らかにした。さらに、本活動を「地域農業を意識し、地場産農産物を優先的に使用することで、病院と地域農業の間に一定の経済的・物理的循環を形成し、給食の質を高めるとともに、地域農業と病院との、間接的・直接的な学びあいが、根強い日本農業を支える概念形成に寄与すること」と定義し、展開方策を明らかにした。

以上のように、本研究では、病院給食の食材購入経路、厚生連病院の先進性、JAの協同組合としての地域対応、病院の活動方針の重要性、地場産農産物使用の意義という五点を指摘し、地場産農産物導入に向けた病院給食のあり方について考察を進めてきた。これらが、実践されることにより、地域の病院と農業の経済的・物理的循環を形成し、地場産農産物を優先的に使用する環境整備が可能になるといえる。

論文審査結果の要旨

地産地消が注目される一方で、給食分野における地場産農産物の普及率がきわめて低い状況にある。本研究においては、地産地消を、輸入農産物に対する国産農産物の優位性を広め、深める活動であると捉え、安価な輸入農産物やそれに準ずる加工品の使用が懸念される当分野において、本活動を展開する意義が大きいことを明らかにした。具体的には、その今日的意義と展開方策を考察し、以下の四点を結論づけた。

第一に、農業協同組合の一員である厚生連病院を対象にその実態分析を行い、厚生連病院は一般病院に比べ地域農業を意識しており、本活動の先進事例となることを明らかにした。第二に、JAの病院給食における対応について検討し、地域公益性を発揮できる活動の一つとして地産地消があることを明らかにした。第三に、業務委託下での活動方策について検討し、地場産農産物導入には、契約内容への明確な記載が活動根拠となることを明らかにした。第四に、活動の意義を検討し、質の高い給食提供に寄与する循環過程と、病院の透明性を高めることが地域農業を意識した給食運営を可能にすることを明らかにした。さらに、本活動を「地域農業を意識し、地場産農産物を優先的に使用することで、病院と地域農業の間に一定の経済的・物理的循環を形成し、給食の質を高めるとともに、地域農業と病院との、間接的・直接的な学びあいが、根強い日本農業を支える概念形成に寄与すること」と定義し、展開方策を明らかにした。

本研究では、地産地消との関連性が体系的には考察されてこなかった病院給食を対象に、詳細な実態分析と大規模アンケート調査から結果を導出した。新しいアプローチと給食提供側の視点からの実践的な理論検討を行っており、今後給食分野における地場産農産物活用を考えるうえでの有益な知見となると評価される。

よって、学位審査委員会は、本論文が、博士（学術）の学位論文に値すると判定した。